

投句欄 自由律の泉 ㊿

- | | | | | | |
|----|-------------------|---------|----|----------------------|--------|
| 1 | 粉雪舞う日はワルツと過ごす | 竹内 朋子 | 11 | あるものをかぞえている | 植田 鬼灯 |
| 2 | 青空の庭の塀 小さな蜜柑ふたつ | 大岳 次郎 | 12 | 戦争を知らずに僕らは育つたと歌う君に乾杯 | 井尾 良子 |
| 3 | 荒れ庭に彼岸花咲く自閉症の子と老婆 | 小山 榮康 | 13 | 一日分の孤独ちよこんと座る | 原 さつき |
| 4 | 友だちポツポツ抜けて行った木守柿 | 金澤 ひろあき | 14 | 『冬の星座』 口遊みつつ二日月さまと | 山本 説子 |
| 5 | テーブルクロスにうつりゆく四季 | アカホリ フキ | 15 | 日本の背骨がどこかうすら寒い | 黒瀬 文子 |
| 6 | 海からの初日の出東半分だけ | 木村 浩 | 16 | 聞けば余命も言いたげな若い医師 | 平岡 久美子 |
| 7 | 底冷えの顔開く能登半島地震 | 野谷 真治 | 17 | 群れ離れなくてはと老は悟った | 田中 直心 |
| 8 | ゆつくりと老いてゆく町 | 無 一 | 18 | システム手帳 今では医者予約帳 | 見崎 厚志 |
| 9 | はふはふと肉まんの熱い朝を喰う | 久光 良一 | 19 | カラカラと 風に吹かれて 爺々の風ぐるま | 檜 幽可 |
| 10 | ヤッター! 荒れた畑にも露の薑 | 増田 壽恵子 | 20 | 罪の意識ユトリロの雪景色 | 平林 吉明 |
| | | | 21 | 朝寝坊も治療と自解朝ドラは楽し | ちば つゆこ |

22 空を見たさわさわ光る葉と葉のうえ 青井 こおり

23 涙拭く冬空のハンカチ 篠原 紀子

24 破壊と死のニュースに孫を抱き寄せる 部屋 慈音

25 締め切りが来たどうにもならない命 富永 鳩山

26 君はいぬ池で鴨見やる 湯原 柳泉洞

27 白泉忌滑って転んで友が逝っちゃったよ 伊藤 哲英

28 咲き始める花の傍を一步一步 萩島 架人

29 白旗にも容赦ない愚かで哀れな星に住む 富永 順子

30 地球おれの命星の命宇宙の命 岩井 汗馬

● 泉 ②より 一句鑑賞

句読点にこめられた吐息を読んでいる 久光 良一

▼ 普段の書き物で何の気無しに使っていた句読点。なるほど「吐息」とはよく言ったものです。確かに「吐息」ですね。(ちば つゆこ)

▼ ことばになったものがすべてではないということをよく表していると思います。(青井 こおり)

薬一錠ころがる雨月 野谷 真治

▼ 六十代になると皆、何かの薬のお世話になっている。同窓会は病氣自慢大会になるし。若い頃、病氣知らず医者要らずだった私も以下同文。衰えて行く自分と「雨月」のイメージがよく合うんだな。お互い気をつけましょ。(金澤 ひろあき)

もう去ぬるんかと目で 植田 鬼灯

▼ “もう去ぬるんか”と同じ言葉を父から言われました。忘れられぬ夜となりました。短律の中に深い愛と感謝と切なさ溢れる温かな愛の眼差しを感じています。(竹内 朋子)

▼ 訪ねて来てくれた人との楽しく暖かい音や声の余韻が残る家から帰ってゆく別れの時の淋しさを目で伝える。その様子をはつきりと見えるシャープな短律が見事です。(部屋 慈音)

▼ふるさとの同窓会でふと目に入った一瞬ですね……何とも言えないやるせない気持ちが伝わってきました。
(白松 いちろう)

保護猫やっとなついて白い秋

原さつき

▼作者のあたたかみのある日常の断片をイメージできました。「白い秋」という表現が詩的で効果的だと思います。(アカホリ フキ)

心から背伸びして杖を蹴飛ばす

田中直心

▼「転ばぬ先の杖」とは言いますが、杖は老人くさくてつく気になりません。しかし、やっぱり転んでしまいました。それでもまだ杖はつかに用心しながら歩いています。「杖を蹴飛ばす」気持ちよくわかります。
(久光 良一)

刺された棘の蒼 今は抜かずにおく

檜 幽可

▼刺された蒼い棘はどんな棘だったのか、動物や植物の棘ではなく心に刺った棘ではないのか、若い時に刺さった棘なら痛くても苦しくてもぬきたくない、思い出と共にそつと抜かずにおいておこう。
(井尾 良子)

真っ赤に燃える大きな夕陽 明日は笑顔よ

増田 壽恵子

▼大きな夕陽は、想像しただけでも気持ち良く穏やかになります。そして夕やけの翌日は晴れると申します。作者のお気持ちが凄く伝わってきて優しい気持ちになりました。
(山本 説子)

カレンダー今年の命をめくれるだろうか

富永 鳩山

▼わかりやすい句です。が、じんわりと共感でき感銘しました。頑張ってください。
(見崎 厚志)

▼私も傘寿に手が届くところに立っている。医者世話にならず過ごせているが、友人の病の報、訃報が届く。カレンダーが気になったときどう生きるか？「〇〇さんのように生きたい」と思う方はいらるのだが……。
(伊藤 哲英)

▼「今年の命」ほんとにそう思う。若い頃には考えたこともなかった。実感できる句。そう思いながらも、その細い手で何かできること、伝えたいこと、残したいことを命が尽きるまで探すのだろう。
(原さつき)

▼まだまだ大丈夫だと思います。少し寂しいと言う作者だけれど、これだけの句を作ることができる「力」をもっているのです。大丈夫です。強気で生きましよう。
(大岳 次郎)

野良はボスの歩みで秋の陽へ

富永 順子

▼野良と言うと、猫か犬か？ いずれにしても、貫禄のボスはゆったりと、身体をくねらせながら、釣瓶落としの陽のなかへ貫禄を持って帰っていく。今日はやっつたと言わんばかりに。
(田中 直心)

束ねた髪の後悔はしない

篠原 紀子

▼個人的に、髪を長くしており、髪を束ねるとピリッとする感じが同感しました。
(木村 浩)

▼ドツキとするほどの恋愛感情として読みました。全てを投げ出して

思いを寄せる人の処へ向かう女性の決意の一瞬に思います。

(平林 吉明)

冬満月 ボクは大人になれるでしょうか

井尾 良子

▼月に語りかけたり、問いかけることが私にもよくあります。大人になれるかと問いかけてはいますが、本当はすでに大人なのではと感じます。真に大人になるとは、どういうことなのかそれを月に問うているのかもしれない。

(篠原 紀子)

柿食べば石を蹴っていた少年の頃

伊藤 哲英

▼私にもあった少年の頃の思い、それは敗戦の苦しみ悲しみも重なっていて苦しくとも懐かしい句に接しました。

(小山 榮康)

▼私は、「柿」を食べても、何も思い出せません、「少年の頃なんて。

(無 一)

▼柿を食うと思いつくのか。柿を食いながら歩いてたのか。そのいずれでも正味いのである。柿の赤と夕日のいろ、少年の歩みと、版画のような木と野原のさまが浮かぶということだけでよいのだ。

(湯原 柳泉洞)

家へ帰る家族のアルバムを捨てに

平林 吉明

▼しばらく、家族のアルバムを見ていないことを知った。父も母も亡くなり、姉も家を出ていない。アルバムの中には家族がいた。家で、家族のアルバムを捨てに行く心境を知りたい。

(野谷 真治)

▼家にも多分100冊を超えるアルバムがあります。被写体が一人の場合はいいのですが、家族写真となると引き取り手がありません。若

い子供たちは簡単に処分と言いますが、この写真を撮ったものはもういません。余計に捨てられずにいます。

(平岡 久美子)

世話をかけるつもりはないがひとり寂しい ちばつゆこ

▼私も寂しいひとり暮しです。子は二人居ますが遠方です。あなたの句の様に思いますが、寝た状態になれば何方かに助けて頂く様になります。その期間ができるだけ短いことを一生懸命お祈りしています。

(増田 壽恵子)

どろんどろん秋の光の中へどろん

黒瀬 文子

▼何時も乍ら驚かされつ放しですが、黒瀬さんの懐は、どの位あるのでしょうか。下の句の「どろん」に込められた巧みさ、滑稽さ、ストーリー性の全てが輝いている一句ですね。

(檜 幽可)

● 係より

次回も、皆様の作品一句と、今回の作品の感想をお寄せください。左記宛て、同封の投句用紙、またはメールにて。

送先〒193・0832 八王子市散田町2・58・4

平岡久美子

メール izumi.jiyuritsu@gmail.com

※投稿先のメールアドレスが変更になりました。

締め切り 2024年4月15日

★「自由律の泉」にご投稿いただいた句や感想は、自由律俳句協会のホームページや公式X、機関誌などでも紹介させていただきます。